

漢詩について

雷 建 徳

中国は詩の国と言われている。詩作は全部漢字なので、漢詩とも言う。

中国には共通語以外に方言が沢山ある。例えば、北方語、上海語、福建語、広東語、客家語等があるが、もし細かく分けると、もっと多くなる。こと訛、発音の違いとなると更に複雑となる。広東省一省だけを例にとってみても、市と地区が十幾つも有り、県になると九十幾つもある。田舎と町、各県と各市の間でも言葉が通じる所と通じない所が沢山ある。県と県の間でも、或は同じ県でも、場所が違えば発音も違うのが常識である。

広い国土にこんなにいろいろな方言、違う発音が存在していることは、とても不便なことである。だが面白いことには漢字を書けばすべての意味が通じる。これも漢字の魅力と不思議だと言えよう。現に今でもそれぞれの方言で漢詩を読んで鑑賞し、楽しんでいるのである。

これは中国国内だけでなく、日本や韓国、又その他漢字を使っている国もしくは地域においても、発音が多少違っていても結構意味が通じるのである。これは勿論漢字が象形文字であるからだ、ある意味において漢字は世界的な文字とも言えるのである。もし世界各国の漢学者が一堂に集まれば、漢字をとおして結構お互いの考えや言わんとする事が通ずるのである。

漢詩の歴史は長い、それだけに、漢詩に関する名言佳句はいくらもある。沢山引用してみることにする。

「詩言志，歌咏言，声依咏，律和声。」

『尚書・舜典』

「詩，言其志也，歌，咏其声也，舞，動其容也。」『礼記・楽記』

「詩，可以興，可以觀，可以群，可以怨，……。多識于鳥獸草木之名。」『論語・陽貨』孔子

「不学詩，無以言。」『論語・李氏』孔子
「『詩』三百，一言以蔽之，曰思無邪。」

『論語・為政』孔子

「在心為志，發言為詩。」『毛詩序』

「心之精微，發而為文；文之神妙，咏而為詩。」

唐・劉禹錫

「詩是心声，不可違心而出，亦不能違心而出。」

『原詩』外篇上 清・葉燮

「詩無達詁。」

『春秋繁露・精華』漢・董仲舒

「寬心應是酒，遣興莫過詩。」

『可惜』唐・杜甫

「辭賦文章能者稀，難中難者莫過詩。」

唐・杜荀鶴

「詩非待文而伝者也。」宋・蘇軾

「詩者，不可以言語求而得，必將深觀其意焉。」

宋・蘇軾

「詩要避俗，更要避熟。」清・劉熙載

「三分詩，七分讀。」宋・蘇軾

「志高則言潔，志大則辭宏，志遠則旨永。如是者，其詩必伝，正不必斤斤爭工拙于一字一句之間。」『源詩』清・葉燮

「詩之基，其人之胸襟是也。」清・葉燮

「有第一等襟抱，第一等學識，斯有第一等真詩。」清・沈德潛

「詩品出于人品。」清・劉熙載

「詩有怨刺之作，騷有愁思之文。」唐・張九齡

「詩不可不改，不可多改。不改，則心浮，多改，則機窒。」清・袁牧 『隨園詩話』

「只將五字句，用破一生心。」唐・李頻

「一日不作詩，心源如廢井。」唐・賈島

「二句三年得，一吟双淚流。」

唐・賈島 『題詩後』

「吟安一個字，拈断数根鬚。」

唐・盧延讓 『苦吟』

「作詩火急迫亡逋，清景一失後難覓。」
宋·蘇軾
「有時忽得驚人句，費尽心機做不成。」
宋·戴復古
「百歲光陰半歸酒，一生事業略存詩。」
宋·陸游
「為人性僻耽佳句，語不驚人死不休。」
唐·杜甫
「六十余年妄學詩，工夫深處獨心知。夜來一
哭寒燈下，始是金丹換骨時。」宋·陸游
「天籟自鳴天趣足，好詩不過近人情。」
清·張問陶
「莫將死句入詩中，此訣傳來自放翁。」
清·袁牧
「愛好由來落筆難，一詩千改始心安。」
清·袁牧
「讀書破萬卷，下筆如有神。」唐·杜甫
「運筆如山未足珍，讀書萬卷始通神」
宋·蘇軾『柳氏二外甥求筆迹』
「詩不可無為而作。」清·薛雪爾『一瓢詩話』
「作詩須多誦古今人詩。不獨詩爾，其它文字
皆然。」宋·歐陽修
「余平生所作文章多在三上，乃馬上，枕上，
廁上也。」宋·歐陽修
「不學博依，不能安詩。」『禮記』
「人之能為人，由腹有詩書。詩書勤乃有，不
勤腹空虛。」唐·韓愈『符讀書城南』
「學詩渾似學參禪，不悟真乘枉百年；切莫嘔
心并剔肺，須知妙語出自然。」
明·都穆『學詩詩』
「昔年有狂客，號爾謫仙人。落筆驚風雨，詩
成泣鬼神。」唐·杜甫『寄李白二十韻』
「不薄今人愛古人，清詞麗句必為隣。」
唐·杜甫『戲為六絕句』
「閉門覓句非詞法，只是征行自有詩。」
宋·楊万里
「汝果欲學詩，工夫在詩外。」宋·陸游
「村村皆畫本，處處有詩材。」宋·陸游
「文章合為時而著，歌詩合為事而作。」
唐·白居易『與元九書』
「詩之外有事，詩之中有人。」
清·黃遵憲『人境廬詩草自序』
「躍躍詩情在眼前，聚如風雨散如烟。敢為常

語談何易，百煉工純始自然。」清·張問陶
「新詩改罷自長吟。」唐·杜甫
「詩家氣象貴雄渾。」宋·戴復古
「凡作詩之體，意是格，聲是律；意高則格高，
聲辨則律辨，格律全，然後始有調。」
（唐時日本僧人遍照金剛『文鏡秘府·論文意』）
「一句能令萬古傳。」唐·鄭谷『卷末偶題』
「一更更盡到三更，吟破離心句不成。數樹秋
風滿庭月，憶君時復下階行。」唐·杜荀鶴
「須知極樂神仙境，修煉多從苦處來。」
清·袁牧『箴作詩者』
「意匠如神變化生，筆端有力任縱橫。須教自
我胸中出，切忌隨人腳後行。」
宋·戴復古『論詩十絕』
「拳世皆宗李杜詩，不知李杜更宗誰？能探風
雅無窮意，始是乾坤絕妙辭。」
明·方孝儒『論詩』
「名山事業有誰私？不是心精那得知。日厭三
餐何需肉，胸無萬卷敢言詩。每逢節錯根盤處，
試看渠成水到時。拳世爭鳴應記取，茫茫浮海賴
篙師。」吳卓銘1889-1971 江蘇常州人。
「世間何事好，最好莫過詩。一句我自得，四
方人已知。生應無輟日，死是不吟詩。」
唐·杜荀鶴『苦吟』
「新篇日日成，不是愛聲名。旧句時時改，無
妨悅性情。」唐·白居易『詩解』
「千篇著述誠難得，一字知音不易求。」
唐·齊己『謝人寄新詩集』
「平生五字句，一夕滿頭絲。」
唐·曹松『崇義里言懷』
「讀書貧里染，搜句靜中忙。」唐·裴說『句』
「詩從肺腑出，出輒愁肺腑。」
宋·蘇軾『讀孟郊詩』
「君詩如秋露，淨我空中花。」
宋·蘇軾『病中夜讀朱博士詩』
「隨人作計終後人，自成一家始逼真。」
宋·黃庭堅『以右軍書數種贈丘十四』
「老去讀書隨忘却，醉中得句若飛來。」
宋·范成大
「有梅無雪不精神，有雪無詩俗了人。日暮詩
成天又雪，與梅并作十分春。」
宋·盧梅坡『雪梅』
「詩是無形畫，畫是有形詩。」

宋・張舜民 『跋百之詩画』

「達意言常省，微吟步自遲。」

宋・徐璣 『喜爽上人至』

「由来作者皆攻苦，莫信人言七步詩。」

宋・劉克庄 『題蔡主簿詩卷』

「此詩語散緩，細読有奇趣。」宋・惠洪

「只道真情易写，那知怨苦難工。」

宋・陸游 『臨江仙』

「使我常忘酒易，要君不作詩難。」宋・辛棄疾

「詩不窮人，人道得詩，勝如得官」

宋・陳人傑

「文如腹中所欲語，詩是別後相思資。」

清・黃遵憲 『己亥統懷人詩』

「海外偏留文字緣，新詩脫口每爭伝。」

清・黃遵憲

「詩從触処生，新者輒成故。」

清・趙翼 『佳句』

「詩文随世運，無日不趨新。」

清・趙翼 『詩論』

「国家不幸詩家幸，賦出滄桑句便工。」

清・趙翼 『題元遺山集』

「世情如月有明晦，詩興似雲無古今。」

清・潘德輿

「但肯尋詩便有詩，靈犀一点是吾師。夕陽芳草尋常物，解用多為絶妙詞。」清・袁牧 『遣懷』

「改詩難于作，辛苦無定程。」

清・袁牧 『改詩』

「鶯老莫調舌，人老莫作詩。往往精神衰，重複多繁詞。」清・袁牧 『人老莫作詩』

「老來不肯落言詮，一月詩才一兩篇。我不覓詩詩覓我，始知天籟本天然。」清・袁牧 『老來』

「読書兩眼枯見骨，吟詩个字嘔出心。」

宋・楊万里 『書莫誦』

「詩非易作須勤誦，琴亦難精莫廢彈。」

宋・劉克庄 『贈玉隆劉道士』

「詩文随世運，無日不趨新。」

清・趙翼 『論詩』

「一語極工巧，万口相咨嗟。是知花与詩，同出天精華。」清・趙翼 『静観』

「落日留霞知我醉，長風吹月送詩來。」

宋・陳与義 『後三日再賦』

「使我常忘酒易，要君不作詩難。」宋・辛棄疾

「不留三句五句詩，安得千人万人愛！」

宋・楊万里 『醉吟』

以上，詩人，名家の詩句名言を沢山引用したのは、彼らがいろいろな角度から詩の作用，詩の特徴，詩の難しさ，詩の楽しさ，詩のよさ等を述べているからである。これらの引用句は，どの一句をとっても論文として立派に使え，深い意味をもっている。それは詩人たちの体験であり，作詩の経験談でもあり，また人生観でもあるのだ。

中国の詩の歴史は長い。どの時代にも優れた詩人が多く出ており，詩の数も多い，現代の詩人も少なくなく『中国当代詩詞選』に多く見られる。詩の同好社はおおざっぱに数えても，百を下らない。例えば安徽省詩詞学会，広州詩社，湖南岳麓詩社，洞庭詩社，湖北黃岡東坡赤壁詩，江蘇江南詩詞学会，上海半江詩社，楊州綠楊詩社，蘭州詩詞学会などで，これは実に喜ばしい動向である。

一九八二年に出版された『洞庭詞選』の初版一万八千冊は，飛ぶように短時間に売り切れてしまった。このことは，詩人と詩の愛好者の多いことを物語っている。

一九八〇年に催された中国全国児童詩歌コンクールでは，応募者八万のうち八名が優秀入賞者に選ばれた。第四位のちびっこ詩人田曉菲（女）は二百首近くの古詩を暗誦でき古文体の文章も十数篇を暗誦できるということであった。所謂「熟読唐詩三百首，不会吟詩也会吟。」という道理は，とりもなおさず幼少から詩文を暗誦する重要さと有利さを物語っているのである。

漢詩にはいろいろな形がある。長い漢詩もあれば，短い漢詩もある。よく知られている唐代詩人白居易の『長恨歌』は八百四十字もあるが，感心なことに，筆者の知っている何人かの大学教授は『長恨歌』全詩をすらすらと空で唱えられたことが強く印象に残っている。その教授たちは皆若いころ暗記されたもので，その後何十年かたっても忘れることなく，いつでも暗誦出来るのである。

短い漢詩といえは，四言，五言，六言，七言がある。『詩経』の多くの詩は四言であるが，圧倒的に多いのは五言絶句，七言絶句で，六言詩

はあることはあるがあまり紹介されていない。
日本では六言詩は殆ど見られないし、六言詩を作る詩人も稀である。無学の筆者の知る限りでは、釈泰閏、頼山陽と河上肇くらいで実に少ないのである。

五言絶句と七言絶句は「詩の中の詩」と言われている。絶句は絶詩ともいう。丁度明代の文学者楊慎の『昇庵詩話』の言うように「言之精者為文，文之精者為詩，絶句又詩之精者也。」なのである。絶句の特徴は「体裁短小，含蓄精煉，剪裁得宜，富有音節，流伝広遠，音圓調美，好懂易記，容易上口，富有生命力，概括力，表現力強。」で実に素晴らしいものである。

漢詩の詩体題材も実に豊富多彩で、あらゆる面を含んでいる。ざっと挙げてみても次のようなものがある。応制詩，愛国詩，古体詩，近体詩，律詩，絶命詩，告絶詩，抒情詩，送別詩，懷人詩，読書詩，咏梅詩，百花詩，移居詩，咏懷詩，臨終詩，悼亡詩，幽憤詩，孝經詩，雜詩，矯志詩，冬至詩，諧趣詩，打油詩，本事詩，回文詩，宝塔詩，藏頭詩，百韵詩，戦争詩，辺塞詩，愛情詩，数字詩，野詩，四季詩，七步詩，十七字詩，九字詩，藥名詩，題画詩，山水詩，田園詩，神童詩，登山詩，聽琴詩，咏月詩，奇体詩，五步詩，集句詩，初日詩，哲理詩，咏物詩，風景詩，咏古詩，咏史詩，試帖詩，五言古詩，七言古詩，長編叙事詩，七絶組詩，史詩，組詩，諷刺詩，宮女詩，秋閨詩，写景咏懷詩，咏昭君詩，述志詩，辞世詩，一字至七字詩，梅花詩，論詩詩等。

以下数字詩，回文詩，集句詩などから何首かずつ引用してみよう。

数字詩

「一片二片三四片，五片六片七八片。千片万片無数片，飛入梅花總不見。」清・鄭板橋 『鄭板橋吟数字詩』

「天生一隻又一隻，三四五六七八隻。鳳凰何少爾何多，啄尽人間千万石。」明・倫文叙

「一去二三里，烟村四五家，亭台六七座，八九十枝花。」宋・邵康節 『過安樂窩有感』

「一片一片又一片，二片三片四五片。六片七片八九片，飛入芦花皆不見。」明・唐寅 『咏雪

詩』

回文詩

「碧蕪平野暎，黃菊晚春深。

客倦留甘飲，身閑累苦吟。」

「吟苦累閑身，飲甘留倦客。

深春晚菊黃，暎野平蕪碧。」

宋・王安石 『回文詩』

「酒杯春醉好，飛雪晚庭閑。

久憶同前賞，中秋對遠山。」

「山遠對秋中，賞前同憶久。

閑庭晚雪飛，好醉春杯酒。」

『春日雪酬潘孟陽』

「花歸去馬如飛

賞 酒

暮已時醒微力」

「賞花歸去馬如飛，去馬如飛酒力微。

酒力微醒時已暮，醒時已暮賞花歸。」

佚名

「遲遲日氣暖，漫漫雪天春。

知君欲醉飲，思見此交親。」

「親交此見思，飲醉欲君知。

春天雪漫漫，暖氣日遲遲。」

張薦 『回文絶句』

「輕帆數點千峰碧，水接雲山四望遙。

晴日海霞紅靄靄，曉天江樹綠迢迢。

清波石眼泉當檻，小徑松門寺對橋，

明月釣舟魚浦遠，傾山雪浪暗隨潮。」

「潮隨暗浪雪山傾，遠浦魚舟釣月明。

橋對寺門松徑小，檻當泉眼石波清。

迢迢綠樹江天曉，靄靄紅霞海日晴，

遙望四山雲接水，碧峰千點數帆輕。」

明・徐寅

「碧天臨迴閣，晴雪點山屏。

夕烟侵冷箔，明月斂閑亭。」

「天臨迴閣晴，雪點山屏夕。

烟侵冷箔明，月斂閑亭碧。」

「臨迴閣晴雪，點山屏夕烟。

侵冷箔明月，斂閑亭碧天。」

「迴閣晴雪點，山屏夕烟侵。

冷箔明月斂，閑亭碧天臨。」

「閣晴雪點山，屏夕烟侵冷。

箔明月斂閑，亭碧天臨迴。」

「晴雪點山屏，夕烟侵冷箔。」

明月斂閑亭，碧天臨迴閣。」
 「雪点山屏夕，烟侵冷箔明。」
 月斂閑亭碧，天臨迴閣晴。」
 「点山屏夕烟，侵冷箔明月。」
 斂閑亭碧天，臨迴閣晴雪。」
 「山屏夕烟侵，冷箔明月斂。」
 閑亭碧天臨，迴閣晴雪点。」
 「屏夕烟侵冷，箔明月斂閑。」
 亭碧天臨迴，閣晴雪点山。」
 「夕烟侵冷箔，明月斂閑亭。」
 碧天臨迴閣，晴雪点山屏。」
 「烟侵冷箔明，月斂閑亭碧。」
 天臨迴閣晴，雪点山屏夕。」
 「侵冷箔明月，斂閑亭碧天。」
 臨迴閣晴雪，点山屏夕烟。」
 「冷箔明月斂，閑亭碧天臨。」
 迴閣晴雪点，山屏夕烟侵。」
 「箔明月斂閑，亭碧天臨迴。」
 閣晴雪点山，屏夕烟侵冷。」

錢惟治 『連環詩』

次に宋代の李禺の回文詩一首を紹介して見よう。

「枯眼遙望山隔水，往来曾見幾心知。
 壺空怕酌一杯酒，筆下難成和韻詩。
 途路阻人離別久，訊音無雁寄回遲。
 孤灯夜守長寥寂，夫憶妻兮父憶兒。」
 「兄憶父兮妻憶夫，寂寥長守夜灯孤。
 遲回寄雁無音訊，久別離人阻路途。
 詩韵和成難下筆，酒杯一酌怕空壺。
 知心幾見曾来往，水隔山望遙眼枯。」

宋・李禺

伝えるところによると、回文詩は遙か晋代の傅咸、温嶠によって初めて作られたが、残念ながら、二人の作品は伝えられていない。ところが今日現に回文詩を作っている詩人がいるので、その回文詩を紹介しておく。

「東亭小笛晚風微，海碧連雲白鷺飛。
 鐘寺鳴山銜落日，紅橋過犢牧童歸。」
 「歸童牧犢過橋紅，日落銜山鳴寺鐘。
 飛鷺白雲連碧海，微風晚笛小亭東。」

徐元 『夏夕』1947年作

「秋庭一処鈎鈎月，水徑微寒薄薄衾。」

幽榻病殘吟夢遠，冷窓孤照獨灯青。」

「青灯獨照孤窓冷，遠夢吟殘病榻幽。」

衾薄薄寒微徑水，月鈎鈎處一庭秋。」

徐元 『秋夜』1947年作

〔集句詩〕（四首の詩の中から一句づつを取って新しい意境を作る詩のことを集句詩という。）

「兩岸山花似雪開，一杯一杯復一杯。」

勸君更盡一杯酒，二月已破三月來。」

清・查慎行 『二月杪偕諸兄弟西阡看梅集句』

この詩は下の四首の詩の中から一句づつ取って作ったものである。

「兩岸山花似雪開，家家春酒滿銀杯。」

昭君坊中多女伴，永安宮外踏青來。」

唐・劉禹錫 『竹枝詞』

「兩人對酌山花開，一杯一杯復一杯。」

我醉欲眠君且去，明朝有意抱琴來。」

唐・李白 『山中與幽人對酌』

「渭城朝雨浥輕塵，客舍青青柳色新。」

勸君更盡一杯酒，西出陽關無故人。」

唐・王維 『渭城曲又は送元二使安西』

「二月已破三月來，漸老逢春能幾回？」

莫思身外無窮事，且盡生前有限杯。」

唐・杜甫 『絕句漫興』

〔集句詩〕

「山桃溪杏兩三栽，嫩蕊商量細細開。」

最是一年春好處，明朝有意抱琴來。」

宋・王安石 『招葉致遠』

「山桃溪杏兩三栽，樹樹繁花去復開。」

今日主人相引看，誰知曾是客移來。」

唐・雍陶 『過旧宅看花』

「不是愛花即欲死，只恐花盡老相催。」

繁枝容易粉粉落，嫩蕊商量細細開。」

唐・杜甫 『江畔獨步尋花』

「天街小雨潤如酥，草色遙看近却無。」

最是一年春好處，絕勝烟柳滿皇都。」

唐・韓愈 『早春呈水部張十八員外』

「兩人對酌山花開，一杯一杯復一杯。」

我醉欲眠君且去，明朝有意抱琴來。」

唐・李白 『山中與幽人對酌』

六言詩の歴史は長く、漢代から唐代，宋代，そしてずっと今日にまで続いている。1987年に

は中国の現代詩人蕭艾氏が『六言詩三百首』を出版した。その「巻前絮語」の見解には敬服に値するものがある。

ここに中国と日本の六言詩を幾つか引用してみよう。

〔中国の六言詩〕

「柳岸鳴蜩綠暗，荷塘落日紅酣。

三十六陂烟水，白頭想見江南。」

宋・王安石 『題西太一宮壁二首の一』

「三十年前此地，父兄持我東西。

今日重來白首，欲尋旧迹都迷。」

宋・王安石 『題西太一宮壁二首の二』

「一年一年老去，明日後日花開。

未報長安平定，万国豈能銜杯。」

唐・韋應物 『三台』

「三巴亦有何好，万里翩然自尋。

本意為君說破，消磨夢裏光陰。」

宋・陸游 『六言』

「呵凍画灰鍛詩，旁人笑汝白痴。

五百年有名世，七十翁如小兒。」

宋・劉克莊 『村居即事』

「月在荔枝梢上，人行茉莉花間。

但覺胸吞碧海，不知身落南蠻。」

宋・楊万里 『宴客夜歸』

「春宵似暖非暖，曉夢欲成未成。

風竹時驚雀噪，月窓誰伴梅橫。」

宋・范成大 『不寐』

「江声千里万里，客路長亭短亭。

後夜相思何處？蘆花明月沙汀。」

明・楊基 『送別沈德』

「至近至遠東西，至深至淺清溪。

至高至明日月，至親至疏夫妻。」

唐・李冶(女) 『八至』

「夢裏綠蔭幽草，画中春水人家。

何處江南風景，鶯啼小雨飛花。」

明・楊基 『夢綠軒』

「獨樹桃花自發，高樓燕子誰家？
可惜年年春色，催人白髮天涯。」

明・何景明 『清明日』

「笑時頃城頃国，愁時倚樹憑欄。

爾但一開兩朵，我來万水千山。」

明・李贄 『芍藥』

「官量原如酒量，千杯半盞殊科。

我是人間小戶，十年官已嫌多。」

清・袁牧 『自嘲』

「北固山辺波浪，東都城裡風塵。

此事不同心事，新人何似旧人。」

唐・劉禹錫 『答樂天臨都驛見贈』

「揚子津頭月下，臨都驛裡灯前。

昨日老子前日，去年春似今年。」

唐・白居易 『臨春驛答夢得六言』

〔日本の六言詩〕

「仰天天碧如海，看雲雲白似波。

光滿地花滿樹，愁居奈春色何。」

河上肇 『春色』

「心已久忘世事，姓名又人無知。

獨弄詩蝸廬底，戰雲滿乾坤時。」

河上肇 『戰雲滿乾坤』

「鳥飛竹粉飄窓，雨過松花落地。

文詩一種豐神，蔬笋渾身意氣。」

釋泰岡 『遇題』

「雨過泉聲逾喧，木落山骨尤瘠。

今朝杖底千岩，昨日天邊寸碧。」

賴山陽 『石州路上』

唐の張繼の『楓橋夜泊』

「月落烏啼霜滿天，江楓漁火對愁眠。

姑蘇城外寒山寺，夜半鐘聲到客船。」

この詩は日本人にも大変好まれている。

日本の詩人竹添井井の『楓橋雨夜』

「漁火欲沈江草外，客愁來聚酒杯前。

荒烟冷雨寒山寺，人在楓橋半夜船。」

副島蒼海の『楓橋』

「月落烏啼霜滿天，楓橋夜泊轉蕭然。

兵戈破却寒山寺，無復鐘聲到客船。」

この両詩もまた変わった意境とおもしろみがあると思う。

〔送別詩〕も数えきれない程あるが、唐の王維の『渭城曲』

「渭城朝雨浥輕塵，客舍青青柳色新。

勸君更盡一杯酒，西出陽關無故人。」

この詩は、千何百年来ずっと好まれて読まれてきたが宋代の詩人陳剛中の『陽関詞』

「客舍休悲柳色新，東西南北一般春。

若知四海皆兄弟，何處相逢非故人。」

と前者とは全く逆の趣旨をうたっており、対照

して鑑賞すれば妙味が尽きないと思う。

宋代詩人蘇東坡は優れた才能の持ち主だが、彼の一生は不運で波瀾の多い人生であったがとて楽観豪放であった。彼は不満たっぷりの風刺詩〔洗兒詩〕を作った。

「人皆養子望聰明，我被聰明誤一生。

惟願孩兒愚且魯，無災無難到公卿。」

ところが、清代の虞山という詩人はまた蘇詩のと全然意味の違う〔洗兒詩〕を作った。

「坡公養子怕聰明，我被痴呆誤一生。

還願生子獯且巧，鑽天驀地到公卿。」

これも実に皮肉たっぷりの詩である。

〔詠史詩〕は漢詩の中でも特色のある詩であり、世界詩壇においても独特絢爛な花である。詠史詩の歴史は古く二千年も前に既に存在しており、その内容も豊かで、意味も深い。詠史詩を理解するには多方面の知識が必要である。例えば杜甫の詠史詩『八陣圖』

「功蓋三分国，名成八陣圖。

江流石不轉，遺恨失吞吳。」

この詩に対する解釈はまちまちで見方はいくつもある。そしてこの詩を理解するのも誠に生易しいものではない。歴史を諸葛孔明とそのまわりの人々、時代背景にまで遡って辿っていかねばならない。それこそ徐々に理解を深めていくよりほかない。

〔本事詩〕も中々面白い。どの本事詩をとって見ても、筋書きのあるドラマなのである。

唐代の詩人崔護の『題都城南庄』

「去年今日此門中，人面桃花相映紅。

人面不知何處去，桃花依旧笑春風。」

この詩も千何百年来広く読まれてきたものであるが、中国語学習の観点から見ても、この詩は分かりやすく、発音もしやすく、暗誦できれば、すぐ広く活用できるのである。

日本に文盲が居ないということは、正に現代の奇跡とも言える。日本人なら漢字を知らない人はいないのである。知っている漢字の数は人によって勿論まちまちだが、例えば、「一杯一杯復一杯」この一句を見たら、誰でもすぐ読める。いままで筆者は日本の学生、友人、知り合い、或いは初対面の人に、中国語はそれほど難しくないという実例をあげる場合、大概この一句を

中国語の発音で言ってもらうのである。結局文字では互いに理解できるので、発音さえできればコミュニケーションが可能なのである。

こういう発音しやすい七字一句の詩句は沢山ある。例えば、「一回望月一回悲」「一回白髮一回多」「一年一度一來帰」「一片西飛一片東」「一股在南一股北」「一寸相思一寸灰」「一向天涯一海涯」「一番游歴一番新」「一樹梨花一溪月」「一到花間一忘帰」「一回春至一傷心」「一度相思一度吟」「一年一度到江南」「一回拈出一回新」「一年始有一年春」「一年過又一年春」「一村桑柘一村烟」「一般灯燭一般風」「一重折尽一重新」「一山行尽一山青」「一山未了一山迎」「一寸光陰一寸金」「一山放出一山攔」「一分春是一分愁」「一陣風來一陣沙」「一株楊柳一株花」「一上一上又一上，一上上到高山山」「望郎一朝又一朝」「一尺枝梢一尺風」「一半多晴一半無」「一声梧葉一声秋」「一点芭蕉一点愁」「三更帰夢三更後」「一彈流水一彈月」「一叫一回腸一斷，三春三月憶三巴」「一度逢花一斷腸」「一登一陡一回顧」「一声能遣一人愁」「一折青山一扇屏，一湾碧水一条琴」などである。

筆者が面倒がらずにこんな沢山の読みやすい詩句を引用した理由は、もし漢詩愛好者や中国語学習者がこれらの詩句によって漢詩に興味をもち親しんでもらえるなら、それこそ筆者の望むところであり、願ってやまない次第なのである。

〔悼亡詩〕有名な追悼詩は数え切れない程ある。各時代に人々を感動させた優れた追悼詩を挙げればきりがないので、日中友好にゆかりのある李白の『哭晁卿衡』と、現代詩人劉夜烽の『哭黃寧同志』の追悼詩だけを引用しておこう。

「日本晁卿辭帝都，征帆一片繞蓬壺。

明月不帰沈碧海，白雲愁色滿蒼梧。」

唐・李白 『哭晁卿衡』

晁衡とは誰の事か御存じの方も多い。晁衡とは阿部仲麻呂の中国名である。阿部仲麻呂（701—770）は奈良時代の遣唐留学生で、16才の時、西暦717年に吉備真備らと一緒に中国に赴き、長安に五十三年間も滞在した。唐の役人として勤めていたころ李白、王維、儲光羲らとも親交があった。西暦753年に日本に帰る途中、暴

風にあって安南に漂着したが辛うじて再び長安に戻り、左散騎常侍と鎮南都護に任じられ、故郷日本に帰ることもなく唐にてその一生を終えたのである。

現在西安市の興慶公園に漢白玉石で作られた阿倍仲麻呂記念碑がある。この記念碑は、唐代における中国と日本の友好往来と文化交流等を記したものである。

現代詩人劉夜烽氏の『哭黃寧同志』の追悼詩二首は

「同舟共濟數秋冬，暮暮朝朝相過從。
肺腑通明能見骨，才華橫溢不藏鋒。
逞強常蓄飛鴻志，仗義猶存俠士風。
誰料江行歸皖日，黔滇游迹變遺踪。」
「歸舟破浪下潯陽，病發中途苦備嘗。
本為放懷游貴筑，誰知瞋目滯鳩江。
乍逢朋輩驚疑夢，忍聽妻兒泣斷腸。
肝胆知君莫過我，慟揮老淚哭同行。」

劉夜烽氏は号を惠風、無半車書齋主人。1920年生、江蘇宝應人。現在安徽省文聯顧問、安徽省詩詞学会会長、中華詩詞学会常務理事、中国書法家協会理事暨安徽分会名誉主席等の職にある。劉夜烽氏は安徽省の著名な書道家であり詩人である。彼は幼少にして父親から詩の手ほどきを受け、十才の時すでに詩を作った。彼の書、詩詞はともに基礎がしっかりしているうえ造詣が深く、長年文芸の仕事に携わっておられた関係で経験も豊富で、詩詞の題材は極めて広い。彼の詩詞は二千首あまり有るが、托物言志、豪放横逸、時代の息吹が溢れている。

漢詩の妙味は尽きないものがあり、読めばよる程味が出てくるのである。漢詩は生活から出たもので、生活と切り離せないものである。何時でも何処でも漢詩を味わうことができるのである。特に高齢者にとっては、漢詩を楽しむだけでなく、ぼけ防止もできるのである。詩が病気を治せるという事実は詩の国と言われている中国に実際あった。このテーマを研究して見るのも面白いだろう。

唐代の高齢詩人白居易は74才の時、会昌五年(846年)洛陽の邸宅で当時の高齢詩人を招いた。一番の高齢者李元爽136才、僧如満96才、胡

杲89才、吉皎86才、鄭據84才、劉真82才、盧真72才、張渾74才等、実に頼もしく素晴らしい会合だった。現在日本の高齢者は数も多く、生活条件も良く、詩を楽しむことによって人生をもっと幸せにおくれるのではないだろうか。